



「いのち」は「奇跡」

養護教諭 田中 ちさと



11月7日(火)に4年生から6年生を対象として、助産師の山下加名先生をお招きし「いのちの教育」を行いました。今年度、本校では、教育計画の1つに豊かな心の醸成を掲げ、その中で命の教育の充実に取り組んでいます。

今回は、実際に日々赤ちゃんの誕生に携わり、お母さんの相談や出産の応援、産まれてきた赤ちゃんの呼吸を助けてお母さんに合わせる仕事をしている山下先生のお話を直接聴くことができ、子供たちは真剣に話に耳を傾けていました。

まず、「生きているってどんなこと？」という質問に子供たちは「息をしていること」「心臓が動いていること」などと答え、赤ちゃんの

心音を聞く器械で実際に心臓の音を聞かせてもらいました。音や速さは人によってみんな異なり、生きているぞ!と訴えているようでした。また、「いのちの始まりは？」という話では、お母さんの命のもとである卵子とお父さんの命のもとである精子が奇跡的に出会い、受精卵となって結びつくことを知り、子供たちはびっくりしていました。いのちの始まりの大きさは針の先端くらいの小さな選ばれし者です。それが10か月お母さんのお腹の中で約3000グラムまで成長して生まれてくるのです。山下先生は、どんどんと大きくなっていく赤ちゃんの人形を用意くださり、子供たちは両手でそっと人形を受け取り、少しずつ重くなっていく人形を体感して大切そうに抱いていました。そして、「みんなってすごい」という話では、子供たちに自分の誕生日について質問をし、それはお母さんに陣痛という形で生まれてほしいというサインを送り、自分で決めた日に生まれてきたんだよということを教えてもらいました。子供たちは、みんな自分の誕生日にお母さんやお父さん、そして家族から望まれて生まれてきたのです。そして、家族はもちろん、友達や学校の先生、交通パトロール隊のおじさんや近所のおばさんもみんなのことを大切に思っているということを学びました。



さらに、質疑応答で子供たちは、赤ちゃんは順調に育つとは限らないこと、お腹の中で亡くなってしまうこともあることや生まれてきても先天的に疾患があったり障がいがあったりすることもあると知りました。そして、赤ちゃんを産むということはとても大変で、飲食もままならず、長い出産では48時間以上かかることもあると聞きました。山下先生は、だからこそ赤ちゃんが“オギャー”と元気に産まれた時のお母さんの幸せそうな顔を見ることが嬉しいと話されました。最後に、山下先生は子供たちに自分のことを大切に、そして友達や自分の周りにいる人たちみんなのことも大切にしてほしいと伝えられました。また、周りの人たちはみんなの味方なのだから、困った時は相談してほしいとも話され「いのちの教育」が終わりました。

「いのちの教育」の後、子供たちからおうちの人へのメッセージを書いて送ってもらいました。ほとんどの子供が自分を生んでくれてありがとう、育ててくれてありがとう、大事にしてくれてありがとう、健康な体に生んでくれてありがとう、今の自分があるのはお母さんとお父さんのおかげといった感謝の気持ちであふれていました。そして、自分が生まれてきたことは奇跡ですごくいいことだと思ったとも書いていました。また、おうちの人から子供たちへのメッセージには、自分たちのもとに生まれてきてくれてありがとう、大好きだよ、宝物だよ、嬉しかったよ、応援しているよ、といった愛情がたくさんこめられていました。そして、優しい人になってね、いのちを大切にしてくれ、元気に大きくなってね、などの想いがつまっていました。

いのちは一つ。自分の代わりは誰もいません。そして、誰もがいいところをもって生まれてきます。それは生きていく中で、家族や友達、周囲の人たちとの関わりの中でより大きなものへと育てられていきます。今回、「いのち」は「奇跡」であることを学び、感謝の気持ちをもつことができた子供たちが、今後どのように成長していくのか、とても楽しみです。これから閉校まで後わずかですが、最後まで子供たちのことを見守っていきます。